

2011年4月11日

ともに生きよう！東日本——4月5日～7日仙台訪問記&その後

(有)ビッグイシュー日本 代表
NPO 法人ビッグイシュー基金理事長
佐野 章二

市民の被災地応援のいま——紅邑晶子さんとの対話から

交通、宿が確保できましたので、思い立ち4月5日～7日、仙台に行きました。仙台の販売者や彼らをサポートしてくれる支援団体の方々に、まず、一刻も早くお会いしたいと思いつづけてきたからです。地震の翌12日には仙台のみなさんの無事は確認できていましたが、被災したにもかかわらず、広く市民向けの炊き出しをしている支援団体、「仙台夜回りグループ」、「萌友」の皆さんに感謝の気持ちを伝えたかった。加えて東北地方の市民活動の中心的な拠点団体であり、中長期的にはボランティアの活動を支える市民活動を支え、調整する役割を担うであろう「せんだい・みやぎNPOセンター」の理事長加藤哲夫さん、事務局長紅邑晶子さんに今後のことをいろいろお願いし、協力もできればと思ったからです。

まず、最初にお会いしたのは紅邑さん。開口一番、被災地地元とは乖離するような動きがあるといいます。紅邑さんは以下のようにいいます。

「国際的な活動体験を持つNGOも今回の災害は国内であっても国際規模の災害であると認識していて、復興支援活動も長期化すると考えて、拠点を現地に構えて活動しています。当センターでは、そのような団体とこれまで地元で活動してきたNPO、あるいはこの災害がきっかけで誕生するNPOが連携して、復興支援にあたるような仕組みが必要と思い、『みやぎ連携復興センター』を立ち上げました。」

「以前の被災地では、それまで地域活動してきたNPOとのつながりがないまま、中心的な復興支援をしてきた団体が数カ月の支援活動ののち去っていったことが、問題視されたことがあったと聞いています。災害規模は国内他地域でのものとは、大きく違うものですが、これまでの教訓に学ぶことは必要と思います。そんなこともあって、みやぎ連携復興センターなのです」と。

このような問題意識、危機感から、立ち上げられた「みやぎ連携復興センター」は、中核団体にJC、ジャパンプラットホーム、パーソナルサポートセンター、つなプロ（被災地とNPOをつなぐ合同プロジェクト）、センターが参画、まずNPO・NGOレベルでの調整に乗り出しています。これに社協や行政も加えていき復興連携モデルをつくれないうか、と考えておられます。

阪神淡路大震災のとき、有力NGOの間では、被災地に入る前に、いつ、いかに撤退するかが大切だということが語られました。それは地域の自立を促すためだ、ということでした。しかし、今回は全く事情が違います。第一に、地域が広い、阪神と比較しても少なくとも3～50倍以上の広さがあります。第二に、被害の度合いが違います。津波で街が更

地のようになったところが沢山ありNPOの出る幕はないのではないかと思わされるような状況もあります。住民の方々にも「今まで住んでいたところに家を再建してよいのか？」復興に対する戸惑いがあります。第三に、現地住民、NPOのみならず、自治体も壊滅的被害を受けており復興の担い手の核を喪失しているところが多い。第四に、にもかかわらず岩手県のように内部だけでやりたいと、結果として外からのボランティアを断るようなところなど、被災地地域での対応がまちまちとなっています。

明らかに阪神・淡路大震災とは異なり、当時のNPO・NGOの経験は必ずしも役に立たないのです。

NPO・NGOレベルでも、私が思いっただけで、これだけの困難というか、問題、課題をもっています。にもかかわらず、地元の活動団体には地元が主体でやらないでどうするのか！という悲痛な叫びがあります。

地元の立場でと叫ぶ紅邑さんは一方で、復興は、特に復興構想は日本国内の知恵だけでは無理ではないか？広く国際的に、例えば、コンペなどを行い、それを地元民が選ぶというようなことは考えられないか、ともいいます。プラン・グローバル、アクト・ローカリーということでしょうか？

さらに、たち遅れを見せている仮設住宅の建設、阪神大震災の経験の反省から入居者はコミュニティ単位、少なくとも顔見知り同士を優先するということが語られているけれども、現場ではまず数の確保で、そんなことは話題にすらならない。これをどうしたらいいのか？！

各地で連復センターのようなものが立ち上がっていったとき、そこに決定権限のようなものを付与できないか？！

今後の長丁場の活動をお願いし、後方から可能な限り応援したい、と言うつもりが、次から次へと雲がわくように問題や課題をつきつけられました。

私たちのパートナー——萌友、販売者、夜回りグループ、ビッグイシューソサイエティ

次にお会いしたのはNPO法人「萌友」の芳賀さん。ホームレスの方を対象とする二つのグループホームを運営していますが、このうちの一つにビッグイシューの仕入れポイントを置かせていただいています。ここは震災の翌日から31日まで北仙台カトリック教会を拠点に炊き出しを続けてきました。(ビッグイシュー誌4月15日号「被災地から②」で掲載)今は、街でモノが買える状況になったので、これからは心のケアを中心に活動したいといえます。

ここで、仙台の販売者の近況を伺いましたが、鈴木太さん発行の「ハッピー通信」(別添)と「定禅寺ジャーナル」をいただきました。鈴木さんは以前自衛隊で看護師をしていて、阪神大震災などの現場も踏んできましたが、PTSDとなり今の暮らしをせざるを得なくなったという方です。3月15日号が届かなかったためもあって、半月、「一人災害派遣隊」と称し活動した記録です。以前の豊かなキャリアとホームレス生活の体験の視点が生きるユニークなレポートです。特に、通信の「がんばろう東北の意味を考える」は、大きな被災を受け軽いうつ状態になっている人々に「がんばろう」は禁句であるのに、街をあげてその言葉を唱和することの異常さを指摘しています。

たしかに、仙台の商店街の通りという通りには「がんばれ！日本」「がんばろう東北」の横幕がかかり、誰かが配ったと思われる「がんばろう」ポスターをいっせいに各店に貼るなど溢れかえっていました。阪神淡路のときは「がんばろう！神戸」のワッペンを貼った「ブルーウェーブ」球団が優勝しましたが、街をあげてというようなことはありませんでした。「ガンバレ！」は一時的に元気を出そうとするためには有効でも、この反動はきっとあるように思われます。

街であった販売者のAさんは元気で、また、ぜひ原発特集をお願いしますと編集部への注文も忘れない。ミニコミ発行の販売者鈴木太さんにもお会いしたくて6日午後、7日午前売り場に行きましたが、おられませんでした。もう一人の鈴木さんは風邪で休んでおられました。(4月15日号「被災地から②」に写真掲載)

仙台夜回りグループへは最近移転したばかりの宮城野区宮千代の事務所にお伺いしました。リユース担当の三浦均さんにごあいさつし、その場から電話で青木夫人とお話させていただきました。

また、夜は仙台ビッグイシューソサイエティの小出さんにお会いし、夕食をともにしました。ここに、9時過ぎ仕事を終えた紅邑さんも合流し、懇談しました。小出さんからは身に余る以下のようなお礼のメールをいただきました。

「この度はわざわざのお越し、本当にありがとうございました。スケジュール、時間の工面なども大変ご苦労されたと思います。(うまく表すことができませんが、)ありきたりの言葉にすることすら、もどかしいのですが、短いひとときですが、お会いすることで元気や勇気をいただくことができました。同様の想いを(多分、自分の何倍も、)仙台の販売者や支援者も抱いたはずです。電話でもない、手紙でもメールでもない、顔を合わせ、言葉を交わし、同じ場所、時間を過ごしたことに厚く感謝しています。(後略) 4月10日夜 小出 尚喜」

津波は想定外ではない、鍵は東北の地域性——加藤哲夫さんに教えていただいたこと

6日3時半に仙台厚生病院にお見舞いした加藤哲夫さんは検査入院され、検査にかかろうとしたときに地震に遭遇したといえます。

病院のベットに座っての彼の話しぶりは相変わらず精悍で、思わず質問し聞き入ってしまった。

今回の津波は決して想定外ではなく、明治29年の「明治三陸大津波」では死者・行方不明者2万1959人を記録し、大船渡市三陸町では38.2mの津波が記録されていることを教えてくださいました。また、彼は復興を考えるポイントは被害の大きかった三陸地域を中心とした東北の地域性をどのように見るか？ということでないかと語ってくれました。それは地域の貧しかった歴史とある種の偏狭さのことです。どこかの避難所で、他の地域へ移動する希望者が少なく、わずかな移動希望者へ残った人々から「見捨てるのか」という非難の声が上がったそうです。全世界が驚いた被災地の人々の忍耐強さと礼儀正しさ。皆で一緒に、困難に耐えるその強さと裏腹に偏狭さがあるのではないかと私には思われます。

それと、なぜ、東北に原発があるのか？ということとも関連する地域の貧しさだといえます。加藤さんは続けます。「多くは沿岸での魚採りと少しの自給野菜などで生きてきた地

域です。戦後のもっとも厳しい時代、石巻市渡波から女川町では、海水を薪で焚いて煮詰め、塩を作って、米などと交換していたと聞きました。そのあと遠洋漁業、つまりは長期の出稼ぎの時代が続き、遠洋の行き詰まりから養殖漁業に転換、ようやく目処がたったところに原発が来た、と、当時(1980)反対派の90歳の漁師は言うておりました。」

本当に大事なことを教えていただきました。

また、加藤さんには被災地で活動する人々を描いていただくコラムをお願いしました。(ビッグイシュー誌5月1日号「被災地から③」に掲載予定)

仙台訪問その後——「新しい公共推進会議」「東京販売者サロン」「基金の会議」

仙台から帰った翌8日に開かれた「新しい公共推進会議」では、東日本大震災を乗り越えて新しい東日本地域をつくるための考え方、原則について以下の4つを伝えました。

- ①被災者、被災地域を主体者、当事者にする原則
- ②人の絆、コミュニティを活かす快適でランニングコストの低い地域づくりの原則
→仮設住宅づくりから、まち、地域、東日本にひろげていく
- ③エネルギー、生産、都市機能などにおける分散と多様の原則
- ④既存のルールや制度にしばられない東日本全域での特区的取り扱いの原則

また、鈴木太さんが危惧し、仙台の町にあふれていた「がんばれ!」「がんばろう」は被災者にとって辛いものがあるので、緩和するためにも

「ともに生きよう!東日本」

を呼びかけやスローガンとして使うことも提案しました。

9日の東京販売者サロンでは、鈴木太さんの通信の「がんばろう東北の意味を考える」を、仲間でもある販売者の古屋さんが希望されて読み上げていただきました。古屋さんは読みながら二度ほどこみ上げてくる涙をこらえきれなくなり、40人をこえる参加者が聞き入りました。

そして、10日のビッグイシュー基金「理事会」、つづく「スタッフ会議」で話し合い、ビッグイシューとして「ともに生きよう!東日本」キャンペーンを行っていくことにしました。

追記

ビッグイシューでは、上記登場の「萌友」「夜回りグループ」「せんだい・みやぎNPOセンター」の3団体へは4月5日現在、基金から10万円、会社から20万円計30万円ずつを、それぞれお送りしています。引きつづき寄付のための募金を行っています。

(郵便振替:00900-3-246288 有限会社ビッグイシュー日本)